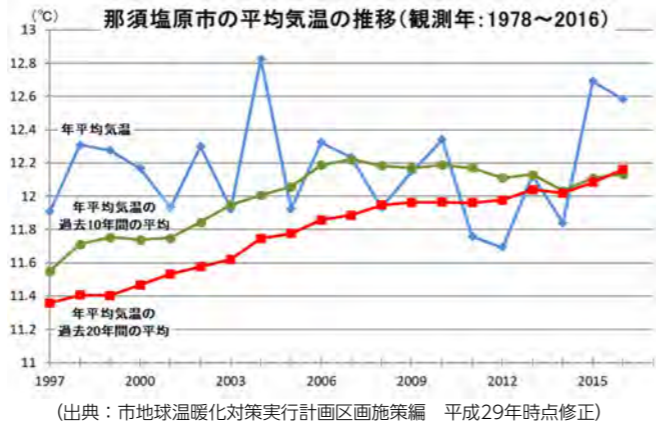
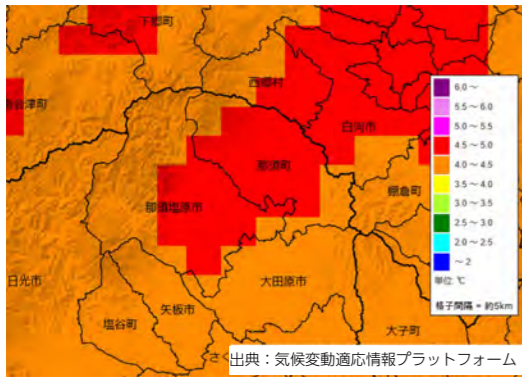
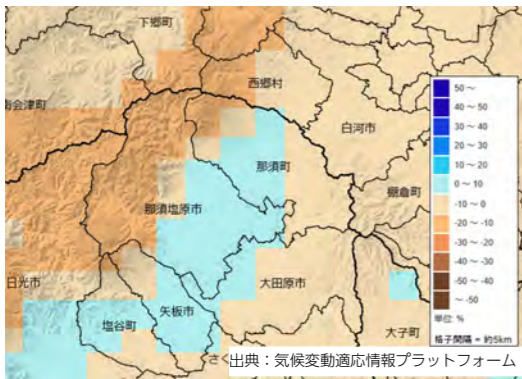


市の年平均気温の将来(2095年)予測



市の年降水量の将来(2095年)予測



**気候変動が及ぼす影響**

近年、世界各地で異常気象が相次いで発生しています。日本でもここ数年、「記録的大雨」という言葉がよく使われるようになりました。2018年7月に西日本を中心として発生した「平成30年7月豪雨」や2019年10月に東日本を中心として発生した「令和元年東日本台風」などは、まだ記憶に新しいところです。気候変動がそのまま進行すると、さらなる気温や海面水温の上昇を招き、大雨の発生回数の増加などが予測されています。その結果、北極や南極海域の氷床が溶けることによる海面水位の上昇、農作物の品質低下、

熱中症の増加、大雨による水害・災害の多発など、命に関わる問題につながるため、今後の気候変動に注意する必要があります。

**本市にも影響が**

本市の年平均気温の過去10年間の平均と過去20年間の平均を見ると、いずれも徐々に上昇しています。国立環境研究所では、2095年までに本市の年平均気温が4〜5度上昇し、真夏日は40〜60日の増加、大雨も0.5〜1日増加することが予測されています。

これらの変化に伴って、高温に起因する病害虫の増加や米の胴割れなど、水稲の品質低下が懸念されています。気温の上昇により、水稲栽培の適地が北上するほか、野菜の生育不良や品質の低下も見込まれています。また、生産量本州一を誇る本市の生乳は、暑さによる乳牛へのストレスの増加から、搾乳量の減少や品質の低下が不安視されています。

気候変動の影響は誰しも無関係ではありません。そのため、その変化にいち早く気付き、対応することが重要です。温室効果ガスの排出を減らして気候変動の緩和をしていくとともに、気候変動による影響に対応する取り組みも一緒に考えていかなければなりません。



**いま**  
現在の私たちができること

未来の私たちのために  
**気候変動**を考える

「気候変動」という言葉になじみがなくても、「地球温暖化」や「異常気象」という言葉を聞く機会は意外と多いのではないのでしょうか。気候変動は、実際、私たちの周りでも暖冬や記録的大雨(集中豪雨)など、日常生活に影響を及ぼしています。

近年の異常気象とその被害

2017年5月	パキスタンからインド北西部にかけて、 <b>断続的な熱波</b> が発生。5月25日から6月7日の最高気温の平均は44℃以上、パキスタン西部では <b>最高気温53.5℃</b> を観測した。
2018年7月	平成30年7月豪雨により、西日本から東海地方を中心に <b>広い範囲で大雨が数日間</b> 続き、河川の氾濫や洪水、土砂災害などが発生。死者263人、行方不明者8人、負傷者484人の人的被害があった。
2019年1月	カナダからアメリカ北部で、1月中旬から気温が <b>平年に比べ著しく低く</b> なり、 <b>最低気温が-40℃</b> になるところもあった。
2019年10月	令和元年東日本台風(台風19号)により、東日本を中心に <b>記録的大雨</b> を観測。河川の氾濫や洪水、土砂災害などで死者86人、行方不明者3人、負傷者476人の人的被害があった。 インド中部で過去23年間で <b>最も多い降水量</b> を記録。インドではこの大雨による洪水で、300人以上が死亡した。
2020年2月	日本では2019年12月~2020年2月にかけて、統計開始以降 <b>最も気温の高い記録的な暖冬</b> となった。

**変化し続ける地球環境**

気候変動とは、長い時間・期間で見たときの気候の変化のことです。気候はもともと、太陽や火山活動などにより自然に変化しています。しかし、近年では人的な影響により、気候が急速に変動しています。

人が生活する中で、石油や石炭などの化石燃料を消費すると、温室効果ガスの一つである二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)が発生します。これが地球温暖化を招き、気候変動につながる重大な要因とされています。そして、これは地球全体の問題になっています。

気象庁によると、温度計が使われるようになった1850年以降、世界の平均気温は上昇傾向にあります。1981~2010年では、世界の年平均気温が100年当たり約0.7度上昇しています。また、北極海の氷床面積が減ってきており、世界の海面水位が1901~2010年の間で19センチメートルも上昇したとされています。日本でも、1898年以降、気温が100年当たり約1.2度の割合で上昇していて、今後も地球温暖化の急速な進行が予測されています。